

## @伏見稲荷大社

東山連峰南端、神奈備山である稲荷山(標高 233m)の山自体が古くより神体山として信仰されてきた。

稲荷山の三ヶ峰(みつがみね、一ノ峰、二ノ峰、三ノ峰)の山麓に、伏見稲荷大社(ふしみ いなり たいしゃ)はある。「お稲荷さん」ともいわれ親しまれ、穀霊神の庶民信仰の社として知られている。

「稲荷本宮」「惣本宮」「藤森稲荷」とも呼ばれた。境内総面積は、27 万坪(892561㎡)にも及ぶ。全国にある4-33 万社ともいわれる稲荷神社の総本宮になる。境内の摂社・末社も数多い。

現在の主祭神は宇莫迦之御魂大神(うかのみたまのおおかみ、中央座・下社)、佐田彦大神(さだひこのおおかみ、北座・中社)、大宮能売大神(おおみやのめのおおかみ、南座・上社)の3社に、

下社の摂社・田の神であり、かつて荒神峰に祀られていた田中大神(たなかのおおかみ、田中社、最北座・下社摂社)、四大神(しのおおかみ/しだいじん、最南座・中社の摂社)が加わり5座になった。これらを稲荷大神(稲荷五社大明神、稲荷五所)と総称している。

古墳時代、4世紀(301-400)後半、稲荷山の三ヶ峰それぞれに、3基の大型円墳群が造営された。首長墓級の古墳とされる。稲荷山全山は、古くより神奈備(かんなび)山として信仰された。また、三峰にそれぞれ上社、中社、下社が祀られていたともいう。5世紀(401-500)前後、この地に秦氏が進出したという。それ以前には、紀氏、賀茂氏が管轄していたともいう。

奈良時代、和銅年間(708-715)、当社が創建されたともいう。711年、如月初午(はつうま)の日、稲荷大神(いなりのおおかみ)が、稲荷山(伊奈利山)の三嶺の平らな所に示現したとの伝承があり創祀となったという。

秦公伊侶具(はたのきみ いろぐ)の「餅的」の記述がある。以来、秦氏一族は禰宜(ねぎ)、祝(ほふり)となり祭祀奉仕を行う。一ノ峰に大宮能売大神、二ノ峰に佐田彦大神、三ノ峰に宇莫迦之御魂大神を祀ったという。

平安時代以来、2月の初午に当社に参詣する習わしがあった。826年、空海は東寺建造の用材として稲荷山の神木を伐り出した。このため、神の崇りにより第53代・淳和天皇が「不与」となる。

827年、空海が第52代・嵯峨天皇により東寺を下賜された際に、稲荷社は東寺の鎮守社になった。以後、天皇、貴族の「福詣り」も盛んに行われた。

◆秦伊侶具 奈良時代の秦伊侶具(生没年不詳、はたの いろぐ)。詳細不明。伊呂巨(いろこ)?。秦中家忌寸(はたの なかつやの いみき)らの祖先。伊侶具は稲を積み上げるほど富裕だった。奢り、餅を的にして矢を射り、餅は白鳥になり飛び去り、山の峰で稲になったため、伏見稲荷大社を「伊奈利(稲成り)社」と名づけたという。

◆秦大津父 6世紀の官吏・秦大津父(生没年不詳、はたの おおつち)。詳細不明。山背の人。有力氏族。商人。馬による交易を行う。第29代・欽明天皇の幼少期、ある人に夢告あり、大津父を寵愛すれば、天皇の壮年に天下を治められるとされ、540年、大津父は大蔵の官吏に任命されたという。

◆秦氏・伊呂具 農耕、豊饒の神の稲荷神は、渡来系古代豪族秦氏により奉祀された神になる。秦氏は機織、養蚕、金工、土木の生産技術に長け、水稻農耕を担い、中央の大蔵分野にも進出し、財政面で支援した。天皇家とも密接な関係を保った。秦氏の勢力拡大とともに稲荷神の神威も増大した。

秦氏は5世紀前半に新羅より渡来してきたという。紀伊郡深草の地には5世紀後半に移住した。

秦氏の長・伊呂具は、大量の稲を収穫し富裕となる。説話が残る。奈良時代、711年、秦公が餅を的に見立て弓を射た。餅は白鳥と化し山上に飛び去り、降りたつたところに稲が生じた。この「伊禰奈利(いねなり、稲生)生いた」「稲成り生いた」から、「伊奈利(いなり)」「稲荷」になったという。その後、凶作が続き、秦氏の家運傾いたため、伊呂具は三柱を稲荷山三ヶ峰に祀り、社の起源になったという。餅とは稲魂、穀霊の象徴になる。これらの伝承は、穀物信仰の現れであり、伊奈利(稲荷)社の祭祀が、秦氏によって行われていたことを示している。「いなり」は「鳴(いな、いばる)」であり、「大きく鳴る」の意味として稲荷山に雨を招く雷神を意味するともいう。

◆荷田氏 稲荷社は旧社家の秦氏とともに荷田氏により神職が継承されてきた。荷田氏は、カモ氏の支流とされる。荷田氏は秦氏に比して深草の土着氏族という。

奥宮(上御殿)脇に秦氏の祖神を祀る長者社とその左隣に荷田氏の祖神を祀る荷田社がある。これは、カモ氏と秦氏の関係を表し、秦氏より先住氏族・荷田氏は賀茂別雷神を祀っていたともいう。荷田氏には、東羽倉、西羽倉、それぞれの分家がある。

伏見稲荷大社の外拝殿南にある東丸(あずままる)神社は、江戸時代の国学者・荷田春満(かだの あずままる)を祀る。

◆お塚信仰 稲荷山(標高233m)は古来より、山全体が神降る、神祀る神南備山(かむなびやま/かんなびやま)として信仰の対象になっている。磐境(いわさか)とされてきた。山には18の峰、20(30とも)あまりの谷があるという。一ノ峰から三ノ峰を巡回する「お山めぐり(お塚参り)」が知られ、総延長は4kmになる。

◆お山めぐり お山めぐりは、「お山する」と呼ばれる。

本殿より、玉山稲荷社、奥宮、千本鳥居を抜け、奥社奉拝所(おもかる石)、根上がりの松(膝松、奇妙大明神)がある。

「奇妙大明神(膝松大明神)」は、「根上がり松」、「ひざ松」とも呼ばれている。松の老木があり、かつては根の部分が浮き上がり、下を潜ることができた。根の下をくぐると肩こり、膝、腰の病平癒するという。松の根を手で撫で、体の痛む部分を摩ると神経痛の痛み、肩のこりが治るとされた。「値上がり」の連想により株、給与上昇の信仰も集めた。

奥社奉拝所のおもかる石、願い事を念じ、石燈籠の空輪の部分を持ち上げる。自分の予想より重く感じると願い事はかなうという。軽く感じると成就しないという。

◆狐 境内の狢狐は神使(しんし)であり、口に宝珠(玉)、鍵、巻物(経文)などを咥えている。宝珠は、稲荷大神が秘める神徳、穀霊を意味する。鍵は、稲荷大神の宝蔵、米倉を開く秘鍵を意味している。狐にまつわるさまざまな話が残る。

稲荷神と関わりの深い狐は、かつて稲荷山に多く生息していたという。神使の狐との関連は、俗信として食物神の「御食津神(御気津神、みけつのかみ)」から「御狐(みけつ)」、「三狐(みけつ)」へと転訛したともいう。

中国では「狼」を「狐」と書いた。540年頃、秦大津父(おおつち)は、商用で出掛けた伊勢の帰りに、稲荷山の大亀谷(狼谷)で、争う二匹の狼(狐とも)を仲直りさせた。その功により、大津父は、欽明天皇の側近に登用され富を成したとの伝承がある。

渡来系の秦氏により、大陸の狼(山犬)への霊性信仰が日本にも伝わった。狼の絶滅後は、稲の害虫である鼠を捕食する狐がこれに代わったともいう。

稲荷神は東寺の鎮守社であり、本地仏の女神・荼吉尼天(だきにてん、茶枳尼天)が狐を眷属としていることから生まれたともいう。荼吉尼天(ダーキニー)はジャッカ(野天、やかん)に乗り、人の願いをかなえる神とされた。やがて、稲荷神と混同され、ジャッカの代わりに狐が神使になったともいう。荼吉尼天は、剣と宝珠を持ち白狐に乗る。

◆名物「伏見人形」は、安土・桃山時代、また、江戸時代、元和年間(1615-1623)に作られるようになり、全国の土人形の元になったという。かつて、深草瓦師が稲荷山の土により、大根、人参などの焼き物を作り、畑に入れて豊作を祈願した。

土型に粘土(埴土)を詰め、乾燥させて焼き、胡粉、岩絵具で彩色した。「深草人形」、「稲荷人形」ともいわれた。初午に布袋の人形を買い求めて神棚に飾り、翌年は少し大きいものを買って求め、7年をかけて七福神とした。その間に不幸があると、すべて川に捨て、再び買い足さなければならなかったという。最盛期には60軒ほどの窯元があった。現在は、「丹嘉」(東山区本町)一軒のみが残る。

参道脇には稲荷鮓、きつねうどんが売られている。狐は稲荷の使いであり、狛の狐に好物の油揚げを御供し、そのお下がりの料理として生まれたともいう。具材の油揚げと狐の毛色が似ていることからの連想ともいう。

「雀の焼き鳥」、「鶉の焼き鳥」は、伏見稲荷が農耕神、五穀豊穡の神であり、その大切な米を食う雀退治のために、雀の焼き鳥が生まれたという。鶉は、平安時代中期まで栄えた伏見、深草界隈も、1156年の保元の乱以後に荒廃し草地と化した。そのため野鳥の生息地になり、雀に代わり鶉焼きになった。近年、いずれも原材料入手困難により店は減っている。

「いなりや」(境内)のいなり煎餅は、小麦粉に白みそ、炒りごまを合わせた生地を薄く焼いた。狐面の形のほか、丸形、お多福、辻占煎餅などがある。

◆千本鳥居・鳥居 千本鳥居なども含め、稲荷山全体に5000基以上の鳥居が奉納されている。願い事が通る、通ったという願掛けの御礼により、江戸時代、化政年間(1804-1829)以降に始まり、本格的には近代以降(18世紀中期)に盛んになったという。

鳥居に見られる朱塗りは「稲荷塗(稲荷朱)」といわれる。由来については諸説ある。稲荷神が赤い楓を好んだことによるもの。赤土の持つ生命力を表している。破邪の呪力を示すもの。鉛丹(光明丹、赤色酸化鉛)には防虫効果があるためともいう。伏見稲荷大社の朱塗り鳥居について、近代以降の傾向とされる。それ以前には、黒木鳥居しか存在しなかったという。

◆お御籤 当社は創祀以来、福の神として信仰されてきたため、お御籤に「凶」はない。「大大吉」「向(むこう)大吉」「凶後大吉」などが出る。

◆映画 現代劇映画「スクール・ウォーズ/HERO

(監督・関本郁夫、2004年、松竹)では境内で撮影が行われた。山上修治(照英)、和田道代(SAYAKA)らが登場し、ラグビー部員らが石段を駆け上がる。

アメリカ映画「SAYURI (Memoirs of a Geisha)」(監督・ロブ・マーシャル、2005年、SPE、ブエナビスタ/松竹)の撮影が行われた。置屋に売られた千代(少女時代のさゆり、大後寿々花)が千本鳥居を駆ける。

◆神仏習合『弘法大師行状絵詞』中、「稲荷来影」の段に、稲を背負った老翁(稲荷神)が空海と再会する逸話がある。空海は筑紫で、稲を担った老翁に出会う。老翁は京都の柴守長者(しばもり ちょうじゃ)といい、仏法守護するという。

また、816年、紀州田辺で行をしていた空海は、仏法隆盛に協力するという老翁(稲荷神)に出会う。その後、823年、身の丈八尺(2.4m)の白髪の老翁は、二人の女と二人の子を連れ、東寺の空海を訪ねる。南大門で翁は、稲を荷い杉の葉を持っていたという。

空海は柴守長者の家(八条二階堂)に一行を泊める。空海は、東南の東山、東寺の仙山で7日間の鎮壇の修法を行い、老翁(稲荷神)に鎮座させた。老翁の「稲荷い」に因み、「稲荷明神」と称したという。

また、和銅年間(708-715)、龍頭太(りゅうとうた)という龍顔で光を放つ翁が稲荷山麓に棲んでいた。昼は耕し、夜は薪を伐採した。姓は荷田(かだ)といい、やはり稲を荷った。

仏法守護するというこの山神の面を彫り、ご神体として稲荷明神の竈殿に祀ったものという。また、弘仁年間(810-823)、空海と約束し稲荷山を守護したという。龍頭太は、竜神、雷神とみられ荷田氏の祖とされている。

826年、東寺の五重塔建築のために、巨木の材24本(塔心材4本、幢材4本、幢柱16本)は、神域の稲荷山から伐り出された。2490人がこの作業に関わる。

この時、ご神木を伐採した祟りとして、淳和天皇が病いになったとされた。朝廷は稲荷社に従五位下の神階を授け、これを謝罪したという。

空海の弟子・実恵(じちえ)が、東寺南大門で、稲を背負う老夫婦に出会う。老夫婦は多数の供を率いていた。実恵が空海に伝えると、空海は中門に引き入れた。

老夫婦は、比叡山の最澄に招かれたという。空海は、比叡山は日吉神が鎮守しているので、東寺を守護して欲しいと頼んだ。老夫婦は承諾し、境内に稲荷神が祀られた。

当社の稲荷祭・還幸祭(5月3日)では、空海が東寺を訪れた老翁(稲荷神)をもてなした伝承に由来する儀式が続く。東寺近くの伏見稲荷大社御旅所(八条二階堂屋敷旧跡)へ、5基の神輿が還御する。途中、神輿は東寺・東門に立ち寄り、東寺僧侶による神饌献供を受ける。これが、空海が稲荷神を饗応した伝承に因むものという。